

かんさい

ついのすみかにて

ホームホスピス編

重い病気や認知症を抱え、1人で自宅で終末期を過ごすのは、介護サービスが普及した今も困難が続きまとう。そんな中、家族がいてもいなくても、地域で最期まで暮らせる人も一つの家として、増えつつあるのが、民家で少人数の高齢者がスタッフらに見守られながら暮らす「ホームホスピス」だ。その一つ、兵庫県尼崎市の「愛達の家」で昨年2月、85年の生涯を全うしたシングル女性がいた。

シングル single style スタイル

平野繁子さんが愛達の家に来たのは2014年1月。持病のC型肝炎から肝がんに行き、「つらい治療はしない」と決め、高齢者住宅で暮らしていたが、体が弱り、ベッドから車いすに自力で移れなくなった。常駐スタッフがおらず、「トイレに連れて行って」という頼み事に即応してもらえない。悩んでいた平野さんに、「ここなら、呼んだらすぐ来てもらえる」と愛達の家への入居を勧めたのが、ボランティア仲間の坂本敬子さん(76)だった。入居手続きも坂

生ききって地域で看取り



自立と協調 もう一つの家

本さんが代行した。

愛達の家は、訪問介護などを行うNPO法人が09年に木造2階建ての一軒家で開設。大きな改修はエレベーターを付けたぐらい。入居者5人が1、2階のそれぞれの部屋で暮らす。生活に必要な支援や見守りを昼間2人、夜間1人のスタッフが行い、必要に応じて医師の往診や訪問看護などの外部サービスを入れる。

食事は皆で一緒にダイニングルームでとるのが基本だが、平野さんは「部屋で食べたい」と希望し、かなえられた。愛達を家の管理責任者、兼行楽子さん(65)は「自分らしく生ききってもらうのが私たちの願いです。自立して生きてきた分、他人と折り合せて暮らすのは苦手だったのかも。言葉の歯切れが良く、面倒見のいい人でした」

平野さんは同年代では珍しいキャリア女性。広島的女子



「愛達の家」のダイニングルームで、坂本さん(右)と笑い合う平野さん(中央)、兵庫県尼崎市の「愛達の家」で撮影。愛達の家提供。ダイニングで一緒に食事をする入居者、スタッフら(昨年12月) 永尾泰史撮影

ホームホスピスは、NPOが空き家などを活用して運営。在宅介護が難しい人や、医療依存度が高く施設に受け入れてもらえない人たちが入居し、スタッフが24時間体制で支える。宮崎市の「ホームホスピス宮崎」が2004年に開設した「かあさんの家」が草分けで、現在は全国に24か所。11か所が開設準備中だ。

10年余りで全国24か所

愛達の家は、入居一時金30万円のほか、居室費や食費、介護保険、医療保険を利用した際の自己負担分などを合わせ毎月15万~17万円程度かかる。制度化されたものではないため、先駆的なホームホスピスの管理者らが昨年、一般社団法人「全国ホームホスピス協会」を設立し、ケアや運営の基準を作った質の確保に努めている。

らと話を花を咲かせた。「ひとりよがりにならないように」と傾聴や介護の講座に通い、入居者の話を聞いて、要望や不満を職員に伝える役目も担ったという。ボランティアは20年近く続いた。愛達の家での1年間、園田苑の職員やボランティア仲間が、好物のアップルパイやパンを持って頻りに訪れた。「ここへ来られて良かった。何でもみんなに良くしてもらえんやろ」。そんな平野さんのつぶやきに、兼行さんは「一人のために動いてくれたお返しです」と答えた。

友人らと祝った85歳の誕生日から10日後の朝、平野さんは息を引き取った。ボランティアさん

「平野さんのように、元気な時は人のためにできることをして、できなくなった時は人にお預りできる生き方を、多くの人に目指してほしい。そうすれば『地域での看取り』が広がると思います」と、兼行さんは話した。(中絶聡子)

2016.7.7

ゲーム「妖怪ウォッチバスターズ」の更新データ「月兎組」好評配信中!

でんぱんら僧

LEVEL-5 Inc.

空中にたよう電波をばくばく食べてしまう、わんぱくな妖怪です

THE YOMIURI SHIMBUN